

阿彌陀堂遺跡

— 埋藏文化財緊急発掘調査報告書 —

1993

茅野市教育委員会

阿弥陀堂遺跡

— 埋藏文化財緊急発掘調査報告書 —

1993

茅野市教育委員会

はじめに

阿弥陀堂遺跡の周辺は、駅に近いこともあって早くから開発が進んできた地域です。特に、茅野有料道路が開通してからは、個人の住宅をはじめ、工場や店舗などの建設が相次いで行われるようになりました。しかし、その中にまだまだ水田や畑として利用されているところも少なくありません。

阿弥陀堂遺跡は、かつて茅野有料道路の建設に際し発掘調査が行われ、多くの成果をあげた遺跡であります。その後も集合住宅や店舗兼用住宅等の建設に先立ち、比較的小規模の調査が行われてきました。

今回の調査でも、縄文時代をはじめ、弥生時代、平安時代と様々な時代の住居跡が多数発見されました。

この阿弥陀堂遺跡がどれほどの広がりを見せるのか、またどれだけの規模を持ったものかといったことについては、更に周辺の調査を待たなくてはなりません。

多くの開発が行われ、遺跡が徐々に失われていくのは忍びないものがありますが、こうした小規模の発掘を地道に繰り返すことによって、次第に解明されていくことと思われまます。

この度、長野県労働金庫茅野支店が開設される予定となり、その用地としてこの地が選ばれました。この発掘調査に際し、快く協力していただいた長野労働サービス・長野県労働金庫をはじめ、調査に参加された皆様に感謝致します。

平成5年3月

茅野市教育委員会
委員長 両角昭二

目 次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺構と遺物	5
第1節 住居址	5
第2節 掘立柱建物址	19
第3節 土坑	23
第3章 まとめ	24

挿 図 目 次

第1図 阿弥陀堂遺跡(222)の位置(1/25,000)	1
第2図 遺構分布図(1/200)	3・4
第3図 1-1・2号住居址(1/60)	6
第4図 2号住居址(1/60)	7
第5図 3-1・2号住居址(1/60)	8
第6図 4-1・2号住居址(1/60)	9
第7図 5-1・2号住居址(1/60)	11
第8図 6号住居址(1/60)	12
第9図 7号住居址(1/60)	13
第10図 8号住居址(1/60)	14
第11図 9-1・2号住居址(1/60)	15
第12図 10・11号住居址(1/60)	16
第13図 12・13号住居址(1/60)	17
第14図 14号住居址(1/60)	18
第15図 1号掘立柱建物址(1/80)	20
第16図 2号掘立柱建物址(1/80)	21
第17図 3・4号掘立柱建物址(1/80)	22
第18図 1・3号土坑(1/40)	23
第19図 時代別遺構分布図(1/800)	25

写真図版目次

- 図版1-1 全 景 (西から)
図版1-2 1号住居址 (西から)
図版2-1 2号住居址 (南から)
図版2-2 3号住居址 (南から)
図版3-1 4号住居址 (南から)
図版3-2 5号住居址 (南から)
図版4-1 6号住居址 (西から)
図版4-2 7号住居址と6号住居址炉 (南から)
図版5-1 8号住居址 (西から)
図版5-2 9号住居址 (南西から)
図版6-1 10号住居址 (南から)
図版6-2 14号住居址 (北から)
図版7-1 1・2号孤立柱建物址 (北西から)
図版7-2 1号孤立柱建物址 (北西から)
図版7-3 1号孤立柱建物址 (南西から)
図版8-1 2号孤立柱建物址 (北西から)
図版8-2 2号孤立柱建物址 (南西から)
図版9-1 3・4号孤立柱建物址 (北西から)
図版9-2 3・4号孤立柱建物址 (北西から)
図版10-1 2号住居址須恵器出土状態
図版10-2 5号住居址縄文土器(1~3)出土状態
図版10-3 5号住居址縄文土器(1)出土状態
図版11-1 5号住居址縄文土器(2・3)出土状態
図版11-2 5号住居址縄文土器(4)出土状態
図版11-3 5号住居址石面炉と炉脇縄文土器(5)出土状態 (南から)
図版12-1 6号住居址弥生土器出土状態
図版12-2 9号住居址埋燵出土状態
図版12-3 9号住居址埋燵断面 (東から)
図版13-1 9号住居址炉脇縄文土器出土状態
図版13-2 11号住居址埋燵炉
図版13-3 11号住居址埋燵断面 (東から)
図版14-1 13号住居址弥生土器出土状態
図版14-2 1号孤立柱建物址柱穴
図版14-3 1号孤立柱建物址柱穴
図版15-1 1号住居址出土須恵器
図版15-2 2号住居址出土須恵器
図版15-3 2号住居址出土須恵器
図版15-4 3-1号住居址出土弥生土器
図版15-5 3-2号住居址出土土師器
図版15-6 3-2号住居址出土土師器
図版15-7 3-2号住居址出土土師器
図版16-1 5号住居址出土縄文土器(1)
図版16-2 5号住居址出土縄文土器(2)
図版16-3 5号住居址出土縄文土器(3)
図版16-4 5号住居址出土縄文土器(4)
図版17-1 5号住居址出土縄文土器(5)
図版17-2 5号住居址出土縄文土器(6)
図版17-3 5号住居址出土縄文土器(7)
図版17-4 6号住居址出土弥生土器
図版18-1 6号住居址出土弥生土器高坏
図版18-2 9号住居址出土埋燵
図版18-3 11号住居址炉体弥生土器
図版18-4 13号住居址出土弥生土器

例 言

- 1 本報告書は長野県労働金庫茅野支店建設計画に伴う造成工事に係る阿弥陀堂遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社長野労働金庫サービスの委託を受け、茅野市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、平成4年8月26日から10月26日まで行った。
- 4 発掘調査における記録及び整理は下記の調査員及び調査補助員が行った。
- 5 出土品・諸記録は、茅野市教育委員会文化財調査室で保管している。
- 6 本書の原稿執筆は、調査員の小林深志が行った。
- 7 本報告書の色調、含有物の表示については、標準土色帳を参照した。

文化財調査室

室 長 永田光弘

係 長 鶴飼幸雄

主 任 両角 大

調査員 守矢昌文、小林深志（調査担当）、功刀 司、小池岳史、百瀬 一郎、小林健治
五味みゆき（平成4年9月30日まで）、山崎貴弘（平成4年10月1日より）

調査補助員 武居八千代、占部美恵、牛山市弥、牛山徳博、堀内 渥、伊藤千代美、赤堀彰子
関 喜子、小松とよみ、矢崎つな子、原 敏江

発掘参加者

鶴飼澄雄、鶴飼茂子（一般）

菊原彦之輔、長田 尚、小林作衛、矢崎勝次、相原 公、八木沢金市、江黒石松、

小柳正尾（茅野市シルバー人材センター）

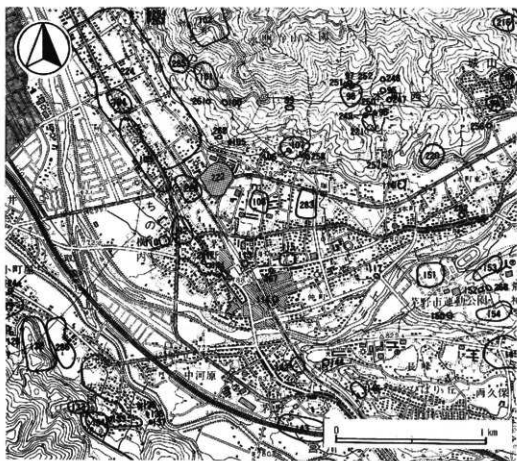
遺物整理参加者 白旗スエ子、目黒恵子、清水閑恵、伊藤京子、立岩貴江子

第I章 調査経緯

第1節 調査に至るまでの経過

阿弥陀堂遺跡は、昭和57年茅野有料道路の建設に伴って調査され、縄文時代から弥生時代、さらには平安時代までの大集落として認識された。その発掘の成果については『構井・阿弥陀堂遺跡』として報告されている。その後、集合住宅や店舗兼用住宅の建設に伴っての事前の発掘調査でも各時代の遺構が検出されている。

今回、長野県労働金庫茅野支店の建設が計画され、株式会社長野労金サービスより茅野市教育委員会に照会があったが、今までの周辺での遺構の検出状況から、当地も遺跡内である可能性が高かった。長野県教育委員会からも事前に発掘調査を行う必要があるとの指導もあり、平成4年度の6月茅野市議会に補正予算案を提出し、議決を待って、発掘調査の委託契約を締結した。



第1図 阿弥陀堂遺跡(222)の位置(1/25,000)

第2節 調査の方法と経過

前回の調査において、調査区を設定した他、航空測量を行った際には基準点測量を実施していたが、今回の調査においては別に調査区を設定し、新たなグリッドの表示を行っている。今回の発掘作業に際しても基準点測量を実施しており、後述するように遺構の配置や分布について合成が可能となった。また、遺構の番号についても新たに1番から付したが、前回の調査で検出された遺構と同一と考えられるものについては本文の中でその事に触れている。

阿弥陀堂遺跡の今回調査を行う範囲は、水田として利用されており、休耕となっていた。調査前は、水田とするため、かなりの部分が削平されてしまっており、遺構の検出は西部と南部になるのではないかと考えていた。

調査に先立ち、8月26日から27日までの2日間、水田の耕土を重機で剥ぐ作業を行った。作業は東側から始めたが、耕土の厚さは予想通り東側が浅く20cmほどで、西側へ行くにしたがって深くなって行った。水田の耕土とその下の床土を剥ぐと直にローム層となるが、部分的に黒色土が広がり、遺物も若干認められる箇所が数箇所あった。表土層を剥いだ段階では、住居址が数軒検出されるだけであろうとの予測をたてた。

作業員を導入しての遺構検出を始めたのは8月31日からである。並行して委託していた基準点測量と杭打ち作業が行われた。

9月の初めからは遺構の掘り下げに入る。縄文土器の一括土器が数点出土するなど、遺構の覆土を掘り下げていることは間違いないのであるが、遺構の重複が著しく、更に床面の高さがほとんど同じであるようでプランの検出は難しかった。

調査が進むにしたがって、住居址の掘り込みは認められないものの、縄文時代の石囲炉や埋燧、更に周溝などが検出されるようになった。また、弥生時代の埋燧が単独で検出されたり、焼土が検出された箇所を精査してみると平安時代のカマドの底部で、灰捨て穴や周溝が検出できるなど、徐々に遺構の数は増加して行った。

遺跡は中央自動車道の諏訪インターチェンジから蓼科・白樺に向かう茅野有料道路沿いにあり、市街地でもあることから、掘り下げ作業と並行して一括遺物の出土状態の写真撮影・図面作成を最優先させ、その日に出土した遺物についてはその日の内に作業を終了するように心掛けた。遺構の平面図作成、断面図作成も可能な限り急いで行ったが、並行して市内各所で行われている遺跡の発掘作業に、熟練した作業員を分散されたこと、後述する遺構と遺物の項でも述べるように、隙を充填した掘立柱建物址が数棟検出されたこともあって、平面図作成は思うように進まなかった。

10月26日、II区の調査範囲を平面図におさめた後、機材の搬出を行い、現地での作業をすべて終了する。

第II章 遺構と遺物

第1節 住居址

本遺跡からは重複や拡張をそれぞれ別に数えると19軒の住居址が検出されている。これには住居のプランが分らなくても石囲炉や埋燗炉・カマドなどによって遺構の存在が確実なものについても含まれている。本来なら時代・時期別に記述を行うところであるが、重複が著しく、それらを切り放しての記述が困難であるため、時代や時期は前後するが、遺構に付した番号順に記述していきたい。遺構番号に枝番が生じたのは、遺構の検出・掘り下げに伴って、遺構に重複や拡張が明らかになったため、それと並行して行っていた遺物の洗浄や注記の中に、既に終了したものがあつたためである。

1 1-1・2号住居址(第3図、図版1-2)

本遺構は、H・I-4・5・6区で検出された。1-1号住居址の平面形は、一部が調査区外に外れるため明確に出来ないが、隅丸長方形になるものと考えられる。長径は不明であるが、短径は522cmを測る。深さは最も深いところで12cmを測る。長軸方向は、N-51°-Eを指す。柱穴は径25~30cm、深さ34~46cmのピットを3本を検出したが、未発掘の箇所にある可能性もあり、一応4本の柱があつたと考えた方がいいものと考えられる。他に中央の炉の脇に2本ピットが検出されている。どちらも径20cm、深さ7cmほどである。炉は地床炉で、中央にある。周溝は認められない。

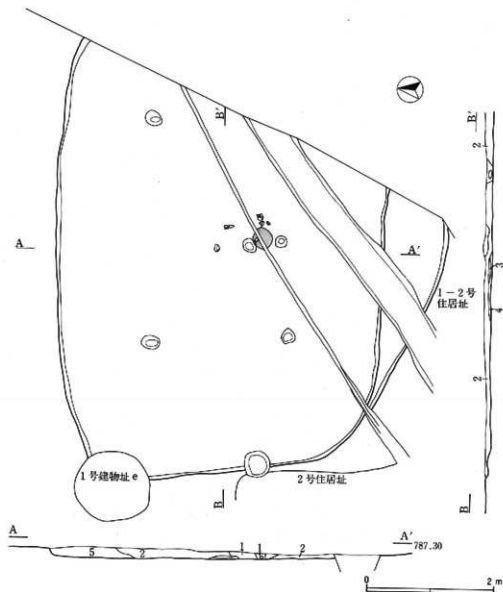
覆土は、攪乱部分を除き、5層に分層が可能である。1層は暗褐色土で、焼土粒子を多く含む。2層は黒色土で、ローム粒子を稀に含む。乾燥すると白味を増し、クラックが生じる。3層は明褐色土で、ロームの再堆積によるもの。4層は暗褐色土で、微細なローム粒子を多く含む。5層は暗赤褐色土で、酸化した鉄分を多く含む。各層とも上部の水田であつた時の影響が強いと考えられる。

遺物は、弥生土器の小片が中央の炉の周辺から数点出土したが、床面に密着しているものから10cmほど浮いているものまであつた。

本住居址の時期は、弥生時代後期に属するものと考えられる。遺構検出時には、須恵器環の半完形品が出土し、平安時代の住居かと考えられた。住居南に僅か2~3cmながら、掘り込みが重複していることが確認され、これが平安時代の住居址になると考えられる(1-2号住居址)。

2 2号住居址(第4図、図版2-1)

本遺構は、G・H・I-3・4区で検出された。平面形は、隅丸方形を呈する。規模は、長径510cm、短径500cm、深さ4cmを測る。長軸方向は、N-42°-Wを指す。主柱穴は検出できなかった。北西壁中央にカマドがあるが、他に北東壁中央にも焼土の痕跡があり、位置を変えて作り直

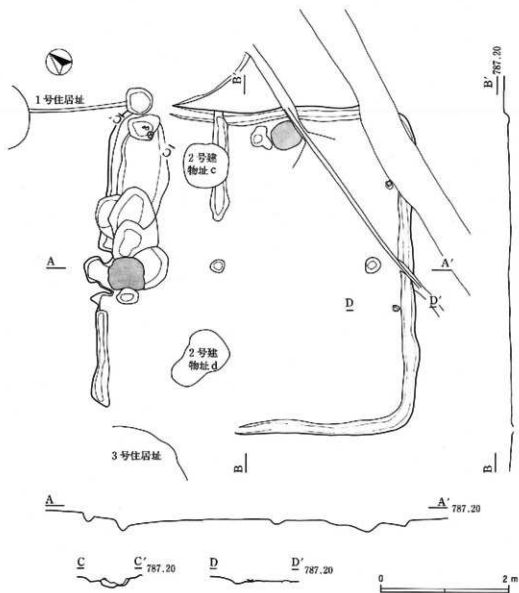


第3図 1-1・2号住居址 (1/60)

されたものと考えられる。周溝は新カマドの場所を除きほぼ全周すると考えられるが、南西壁西半は削平されているようで、痕跡は残っていない。周溝と僅かに残ったコーナー付近の覆土は黒色土であった。

遺物は、北隅のビット上層から土師器坏が、南東壁の東側小ビットと壁際中央付近で須恵器坏が出土している。

本住居址の時期は、平安時代と考えられる。水田の土を取り除いた時点で床面の表れている箇所があり、ほとんど周溝だけが残る状態であったが、平面プランや規模、時期を明らかに出来たのは幸いであった。

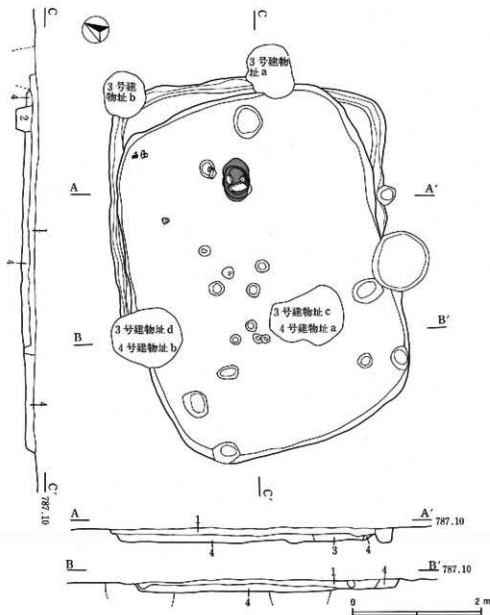


第4図 2号住居址 (1/60)

3 3-1号住居址 (第5図、図版2-2)

本遺構は、F・G-3・4区で検出された。平面形は、隅丸方形を呈する。規模は、長径440cm、短径435cm、深さ13cmを測る。長軸方向は、N-60°-Eを指す。北西壁際中央にあるビットは本遺構に伴うと考えられるが、その他のビットについては3-2号住居址に伴うと考えられる。明確なカマドの検出はなかったが、北東壁際の中央に灰黄色の灰層と考えられる層が観察できた他、東側コーナー付近でも焼土が観察されている。このことから北東壁にカマドがあったと推察される。周溝は、全周していたものと考えられる。

本遺構に関わると考えられる覆土は、4層の内上層の3層である。1層は黒色土で、下層に明



第5図 3-1・2号住居址(1/60)

黄色の砂層が堆積する。しかし、これは部分的で貼り床という感じではない。また、下層には炭化物も認められる。2層は黒褐色土で、ローム粒子の他、1cm大のロームブロックを含む。3層は灰黄色で、灰層になると考えられる。

遺物は、覆土中から土師器杯の半完形品が出土しているが、これも3-1号住居址の床面と考えられる面からは4cmほど浮いている。他に土師器、須恵器、灰釉陶器などの小片が出土している。

本住居址の時期は、平安時代に属するものと考えられる。弥生時代後期の3-2号住居址を切

る形で構築されている。床面は3-2号住居址よりも高い位置にあるが、特に貼り床が為された形跡はない。

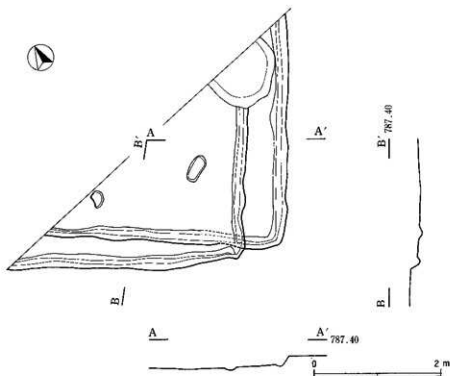
4 3-2号住居址 (第5図、図版2-2)

本遺構は、F・G-3・4区で検出された。平面形は、隅丸長方形を呈する。規模は、長径565cm、短径405cm、深さ19cmを測る。長軸方向は、N-44°-Wを指す。炉は3方を石で囲った石囲炉で、長軸線上にあり、北西壁寄りにある。周溝は認められない。

本遺構に関わると考えられる覆土は、4層の1層だけである。暗褐色土で、ローム粒子の混入が多い。硬くよく締っている。

遺物は、覆土中から多くの弥生土器が出土しているが、完形となるものはなかった。

本住居址の時期は、弥生時代後期に属するものと考えられる。平安時代の3-1号住居址と重複している。



第6図 4-1・2号住居址 (1/60)

5 4-1・2号住居址 (第6図、図版3-1)

本遺構は、F・G-7区で検出された。平面形は、隅丸方形である。規模は、長径440cm、短径は不明で、深さ19cmを測る。長軸方向は、N-44°-Wを指す。柱穴は、今回の調査範囲からも前回の調査範囲からも検出されていない。カマドは、昭和57年の調査で北壁(報文では東壁)中央に粘土で構築されていたことが確認されている。今回検出した範囲には、すべての壁面に周溝が

検出されたが、かつての調査でカマドの東側には周溝はなかったようである。

覆土は、黒色土で、ローム粒子を含む。

遺物は、土師器の小片が僅かに出土しただけであるが、かつて調査した範囲から土師器甕、須恵器坏・蓋、鉄製品が出土している。

本住居址の時期は、平安時代に属するものと考えられる。昭和57年に発掘調査が行われた28号住居址になるものと考えられる。今回の調査では南東隅の壁が一部くびれていたことから精査した結果、僅か3cm弱の深さながら周溝が内側にも認められ、重複している住居ではないかと考えられる。北壁から内側の周溝までの規模は390cmを測る。

6 5-1号住居址(第7図、図版3-2)

本遺構は、F・G-5・6区で検出された。平面形は、円形を呈すると考えられる。規模は、長径570cm、短径・深さは不明である。長軸方向は、N-12°-Eを指す。主柱穴は、6本だと考えられるが、礎て直しにより重複するものと位置を変えたものがあるようである。8~14cm掘り込んだ地床炉が軸線上にあるが、やや北寄りに奥まった箇所にある。周溝は全周していたと考えられるが、南側が削られており、明らかでない。

覆土は、黒褐色土の単一層で、硬くよく締っている。5-2号住居址の覆土とは明確に出来ない。

遺物は、炉の北西側に一括土器が4個体、南側の柱穴脇に大きな破片があった他、覆土が浅い割には破片が多数出土している。しかし、5-2号住居址の遺物との識別は不可能である。復元によりほぼ完形となった一括土器については、出土状況から、この5-1号住居址のものとして見ようと考えられる。

本住居址の時期は、縄文時代中期後半に属するものと考えられる。5-2号住居址、1号孤立柱建物址との新田関係については、5-1号住居址のものと考えられる一括土器が、5-2号住居址の炉が埋った状態の上から出土したこと、同じ様に1号孤立柱建物址の柱穴の上にまで一括土器の出土が続いていることから本遺構が最も新しいと考えられる。

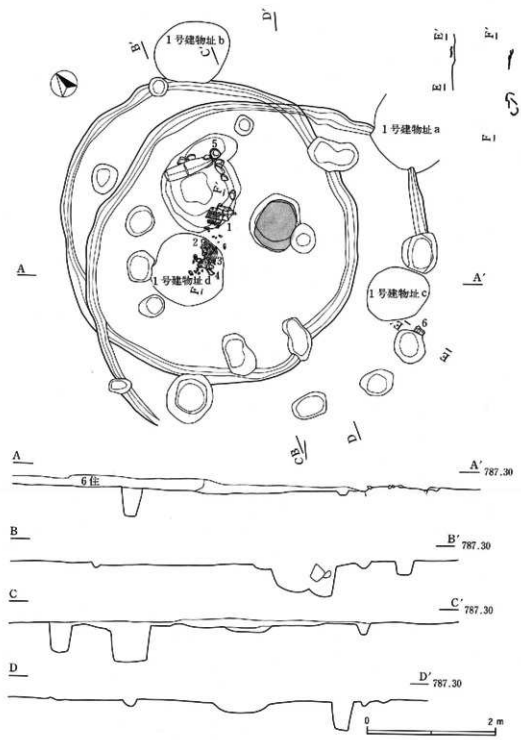
7 5-2号住居址(第7図、図版3-2)

本遺構は、F・G-5・6区で検出された。平面形は、円形を呈すると考えられる。規模は、長径507cm、短径460cmを測る。深さは不明である。長軸方向は、N-16°-Eを指す。主柱穴は4本で、入口と考えられる南壁に接して2本の柱穴が検出されている。炉は深く掘り込んだ周囲を礎て囲う石圍炉であったと考えられるが、抜き取られたものか、北側に残るだけである。軸線上にあるが、やや北寄りに奥まった箇所にある。周溝は全周している。

覆土は、黒褐色土の単一層で、硬くよく締っている。5-1号住居址の覆土とは明確に出来ない。

炉の北東側に埋められていた底部を欠く半円形の土器の他は、5-1号住居址の遺物と判別は不可能である。

本住居址の時期は、縄文時代中期後半に属するものと考えられる。5-1号住居址と重複するが、前に述べたように、遺物の出土状況から本住居址の方が古いと考えられる。1号孤立柱建物



第7图 5-1-2号住居址 (1/60)

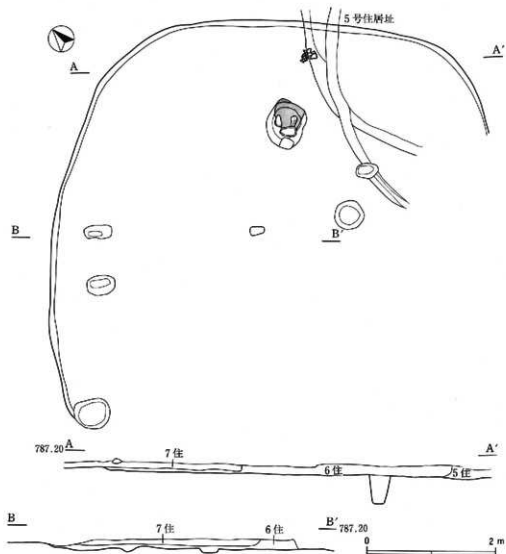
址との新旧関係については不明である。

8 6号住居址 (第8図、図版4-1)

本遺構は、D・E・F-5・6区で検出された。平面形は、隅丸長方形を呈すると考えられるが、南半分を欠いており明らかでない。長径・短径とも不明であるが、深さは20cmを測る。長軸方向は、N-44°-Eを指す。柱状状のピットが幾つか検出できた。炉は3方を礫で囲んだ石囲炉で、長軸線上の北東壁寄りにある。周溝は認められない。

覆土は、暗褐色土でローム粒子の混入が多い。

遺物は、弥生土器類の他、本住居址の範囲内にあると考えられる10号住居址の炉の真上から高坏の坏部が出土している。



第8図 6号住居址 (1/60)

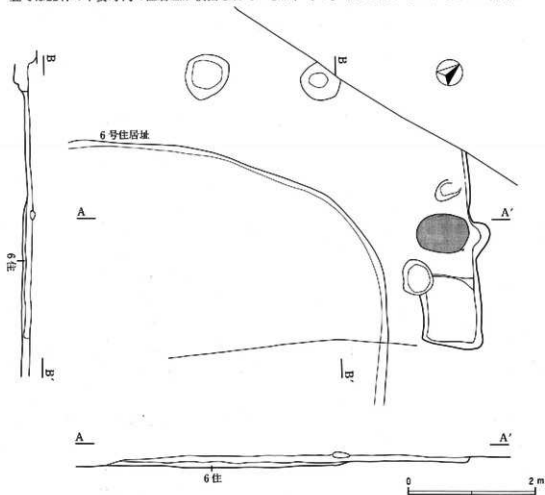
本住居址の時期は、弥生時代後期に属するものと考えられる。

9 7号住居址(第9図、図版4-2)

本遺構は、E・F-6・7区で検出された。平面形は、隅丸方形になるものと考えられる。長径・短径とも不明であるが、深さは9cmを測る。長軸方向は、N-45°-Eを指す。柱穴は、幾つか認められる。東側隅に隅丸長方形で、深さが10cmほどの掘り込みがある。灰捨て穴と考えられる。カマドは北東壁にある。西壁が検出されていないが、北東壁の中央付近に位置しているものと考えられる。かなり削平された中での検出であったので、カマドの構造については明らかでない。周溝は認められない。

覆土は、黒褐色土の単一層で、よく締っている。

本住居址の時期は、平安時代に属するものと考えられる。6号住居址の土層断面によると、カマドを主軸とする反対方向5m程の箇所まで、掘り込みが認められている。昭和57年に行われた調査では22軒の平安時代の住居址が検出されているが、その多くは1辺が3mから4mの前半にか



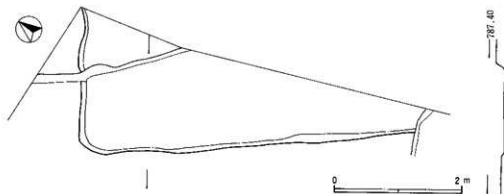
第9図 7号住居址 (1/60)

けての規模のものであるので、本住居址はやや大きいと言えるが、なかには5.7mといった住居も検出されているので、これと並んでの規模の大きい住居址ということになる。

10 8号住居址(第10図、図版5-1)

本遺構は、H・I-6・7区で検出された。部分的にしか検出できていないが、平面形は、隅丸方形ないしは隅丸長方形になるものと考えられる。長径・短径とも不明であるが、深さは5cmを測る。長軸方向は、N-38°-Wを指す。柱穴等の付属施設は、何も検出されていない。炉やカマドは調査範囲内からは検出できていない。周溝も認められない。

本住居址の時期は、遺物の出土もなく、炉やカマドも検出できていないため、不明とせざるを得ない。また、南西の壁と平行するように、遺構の内外に段差が確認されている。地震によって出来た段差の可能性もある。



第10図 8号住居址(1/60)

11 9-1号住居址(第11図、図版5-2)

本遺構は、G・II-6・7区で検出された。平面形は、やや南北に長い円形を呈する。長径580cm、短径540cmを測る。深さは不明である。長軸方向は、N-16°-Eを指す。主柱穴は4本と考えられるが、南西に位置すると考えられる柱穴は掘立柱建物址との重複により、検出出来なかった。炉は深い掘り込みの周辺に礎を置く石囲炉であったと考えられるが、すべて取り除かれており、礎の間に込められていたと考えられる小さな礎だけが残っている。軸線上にあるが、中央よりやや北側に寄っている。周溝は全周していたと考えられるが、削平されてしまったものか部分的にとぎれている。

遺物は、炉の北西隅の外側に一括土器があり、入口と考えられる南側壁際に埋壺があったが、それ以外は破片での出土である。

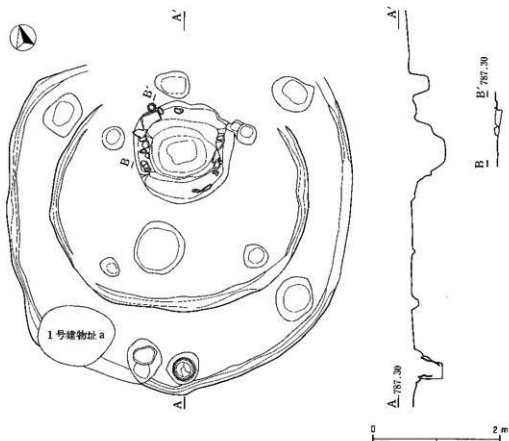
本住居址の時期は、縄文時代中期後半に属するものと考えられる。埋壺の西側にピットがあり、礎がのっていた。9-2号住居址との関係は、炉が一つであることから同じ時期の拡張で、本住居址の方が新しいと考えられる。

12 9-2号住居址 (第11図、図版5-2)

本遺構は、G・II-6・7区で検出された。平面形は、やや東西に長い円形を呈する。主軸は385cmを測る。東西は主軸よりやや長く405cmを測る。深さは不明である。長軸方向は、N-16°-Eを指す。主柱穴は4本検出された。炉の奥壁寄りに不整形で、深さが30cmのピットが、炉の南側に径85cm、深さ20cmの土坑が検出されているが、本住居址に伴うものかは明らかでない。炉は深い掘り込みの周辺に礫を置き石囲炉であったと考えられるが、すべて取り除かれており、礫の間に込められていたと考えられる小さな礫だけが残っている。軸線上にあるが、中央よりやや北側によっている。周溝は全周していたと考えられるが、削平されてしまったものか部分的にとぎれている。

遺物は、炉の北西側の外側に一括土器があり、入口と考えられる南側壁際に埋甕があったが、それ以外は破片での出土である。

本住居址の時期は、縄文時代中期後半に属するものと考えられる。9-1号住居址と周溝が同心円状に回っており、拡張されたものと考えられる。



第11図 9-1・2号住居址 (1/60)

13 10号住居址 (第12図、図版6-1)

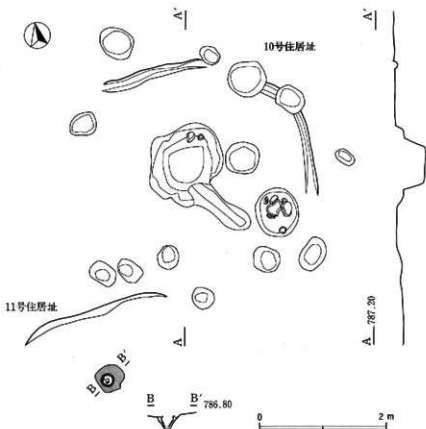
本遺構は、D・E-4・5区で検出された。平面形は明らかでない。長径・短径・深さとも不明である。主軸方向も明らかでない。柱穴と考えられるものは周辺に14本あるが、本住居址にどれが伴うかは明らかでない。炉は深い掘り込みの周辺に礫を置く石圍炉であったと考えられるが、すべて取り除かれており、礫の間に込められていたと考えられる小さな礫が2個残っているにすぎない。炉は中央にあると考えられる。周溝状の溝が部分的に検出されているが、むしろ主柱穴を結ぶ間仕切になるものと考えられる。

遺物は破片での出土で、一括土器の出土はなかった。

本住居址の時期は、縄文時代中期後半に属するものと考えられる。炉の真上から弥生時代後期の高坏の一括土器が出土しているが、6号住居址に伴うものと考えられる。

14 11号住居址 (第12図、図版13-2・3)

本遺構は、D-4区で検出された。平面形は明らかでない。長径・短径とも不明であるが、深さは7cmを測る。長軸方向も不明である。炉は埋竈炉で、周辺まで広くロームが焼けている。周溝は認められない。埋竈以外の遺物はすべて小片である。



第12図 10・11号住居址 (1/60)

本住居址の時期は、弥生時代後期に属するものと考えられる。

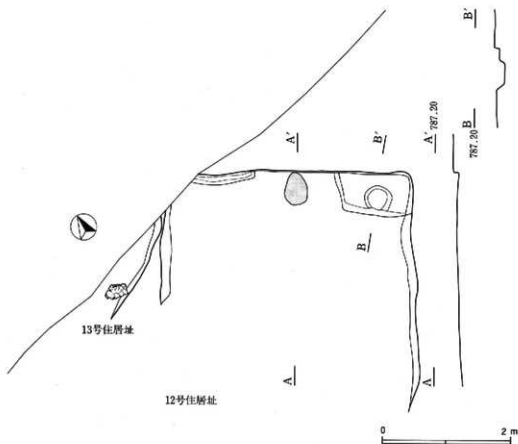
15 12号住居址 (第13図)

本遺構は、C・D-5・6区で検出された。平面形は、南壁が検出できていないので明らかでないが、隅丸方形になるものと考えられる。長径は400cmを測るが、短径は不明である。深さは8cmを測る。長軸方向はN30°Eを指す。柱穴は認められない。カマドは北東壁の中央にある。上部を削平され、火床面に焼土の痕跡を残すだけである。周溝は北東壁面のカマドの北西寄りに一部認められるだけである。

本住居址の時期は、平安時代に属するものと考えられる。北東隅に隅丸長方形で、深さが7cmの灰捨て穴がある。

16 13号住居址 (第13図、図版14-1)

本遺構は、B・C-6区で検出された。壁の一部が検出できただけであるが、昭和57年に調査した19号住居址の一部であると考えられる。その平面図と重ね合わせると、隅丸方形ないしは隅丸長方形になるものと考えられる。長径は不明であるが、短径は500cm、深さ8cmを測る。長軸方



第13図 12・13号住居址 (1/60)

向は、N-57°-Eを指す。柱穴は、今回の調査範囲内からは検出されていない。前回の発掘範囲内からは、西壁に斜孔が幾つか検出されているようである。炉は、前回の調査で埋燧炉が東壁寄りで見出されている。周溝は認められない。

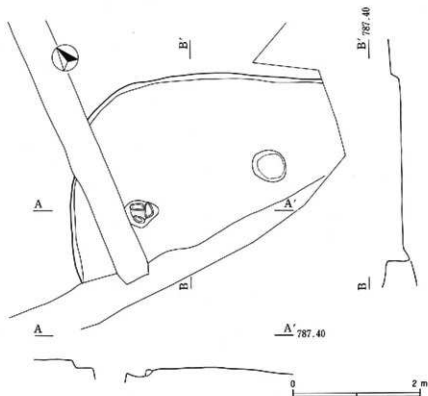
覆土は、前回の調査で3層に分層されている。今回は検出面が低かったこともあり、壁際にあつた黄褐色土だけの単一層であった。

遺物は、調査範囲は狭かったものの、弥生土器甕の一括土器が出土している。

本住居址の時期は、弥生時代後期に属するものと考えられる。

17 14号住居址 (第14図、図版6-2)

本遺構は、H・I-1・2区で検出された。一部が検出されただけなので、平面形は明らかに出来ないが、隅丸長方形になるものと考えられる。長径・短径とも不明であるが、深さは13cmを測る。長軸方向はN-50°-Wを指す。柱穴は検出できなかったが、径50cmほどのピットが1基検出された。深さは24cmある。ピットの覆土は1cm大のロームブロックと炭化物を含んでいる。住居址床面のレベルで5mmほどの厚さで貼り床がされていた。本住居址の掘り下げ時にははっきりし



第14図 14号住居址 (1/60)

なかったが、床面を精査することによって検出できた。直接本住居址に関わりのあるものか不明であるが、周辺に他の遺構もないことから、本住居址に付属する施設としてあつておく。炉は三方を礫で囲った石囲炉で、長軸線上にあり、北西壁に寄っている。周溝は認められない。

遺物は、弥生土器の破片の他、上部確認面では灰釉陶器等の平安時代遺物も出土している。

本住居址の時期は、弥生時代後期に属するものと考えられる。南側が溝址によって切られ、流失していることから、弥生時代後期にはこの溝址は無かったか、もっと南に寄っていたものと考えられる。

第2節 掘立柱建物址

本遺跡からは、4棟の掘立柱建物址が検出されている。これらのすべてが柱を建てた後、隙間に礫を充填したものである。本遺跡はローム面を40～50cm掘り下げると礫や砂混じりのロームとなる。柱穴を掘った際に出土した礫をそのまま充填したと考えられ、特に他から持込んだものとは考えられない。

1 1号掘立柱建物址(第15図、図版7)

本址は、F～H-4～6区に位置する。6本の柱から構成される長方形の建物址である。長軸方向は、N-45°-Eを指す。この柱穴に挟まれた範囲に特に遺物が多いとか、焼土や床が認められるなどの特徴はなかった。

短軸間の距離は、a・b間が354cm、c・d間が322cm、e・f間が350cmを測る。長軸間の距離は、a・c間が360cm、c・e間が310cm、a・e間が650cm、b・d間が310cm、d・f間が334cm、b・f間が642cmを測る。

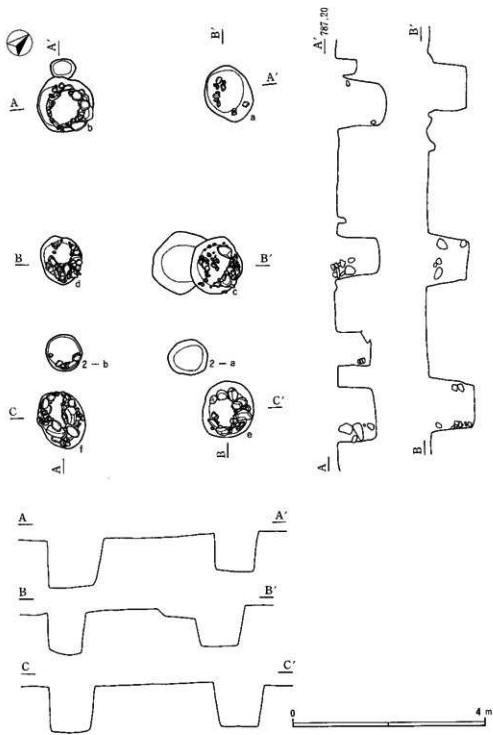
各柱穴の規模は、柱穴eが径108cmで最も大きく、柱穴dが径84～98cmで最も小さいが、ほとんどが柱穴eに似た数値を示す。深さは柱穴aが82cmと最も浅く、柱穴bが103cmと最も深い、ほぼ90cm前後の深さである。本址の柱穴が最も規模が大きく、深い。すべての柱穴には礫が充填されており、柱のおおよその太さを推測することが可能である。それによると、最も太い柱は柱穴bで50～60cmある。また、最も細い柱は柱穴dの30～46cmである。

柱穴aが9-2号住居址、柱穴bが5-1・2号住居址、柱穴cが5-1号住居址、柱穴eが1-1号住居址とそれぞれ重複しているが、それらすべての遺構よりも古いと考えられる。また、2号掘立柱建物址とも重複しているが、新川関係は不明である。

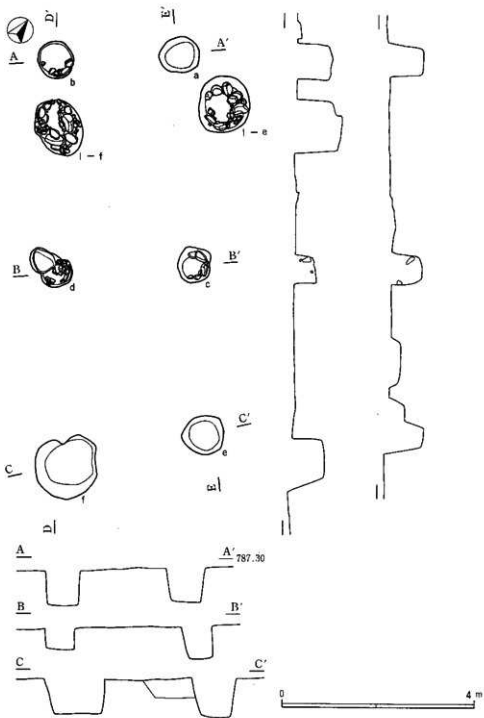
2 2号掘立柱建物址(第16図、図版8)

本址は、G～I-3～5区に位置する。6本の柱から構成される長方形の建物址である。長軸方向は、N-44°-Eを指す。この柱穴に挟まれた範囲に特に遺物が多いとか、焼土や床が認められるなどの特徴はなかった。

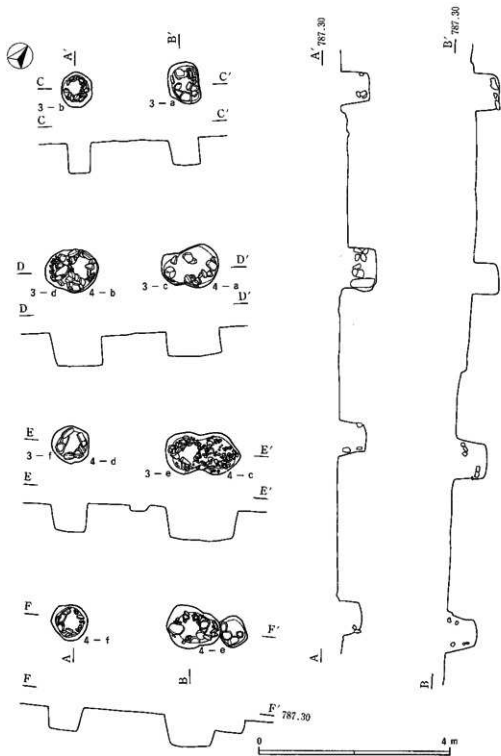
短軸間の距離は、a・b間が264cm、c・d間が290cm、e・f間が290cmを測る。長軸間の距離は、a・c間が440cm、c・e間が352cm、a・e間が800cm、b・d間が450cm、d・f間が404



第15图 1号孤立柱建物址 (1/80)



第16图 2号掘立柱建物址 (1/80)



第17图 3·4号橛立柱遗址 (1/80)

cm、b・f間が854cmを測る。

各柱穴の規模は、柱fが径126~118cmで最も大きく、柱穴dが径68~60cmで最も小さい。深さは柱穴dが44cmと最も浅く、柱穴eが84cmと最も深い。柱穴c・dは2号住居址の中にあり、床面からの深さであるため、ほとんどの柱穴が80cm前後であったと思われる。すべての柱穴には礫が充填されていたが、かなり崩れており、柱の太さを推測することは出来ない。

柱穴c・dが2号住居址と重複しているが、それらよりも古いと考えられる。また、1号掘立柱建物址とも重複しているが、新旧関係は不明である。

3 3・4号掘立柱建物址(第17図、図版9)

本址は、F~H-2~4区に位置する。3号掘立柱建物址の柱穴c・d・e・fが、4号掘立柱建物址の柱穴a・b・c・dと重複し、1・2号掘立柱建物址と同様、それぞれ6本の柱から構成される長方形の建物址になるものと考えられる。しかし、柱穴に充填された礫の状況から、建て変えはあったものの、最終的には8本の柱穴で構成される大きな掘立柱建物址があったと考えた方が良くもしいない。長軸方向は、どちらもN-38°-Eを指す。この柱穴に挟まれた範囲の北側は3-1-2号住居址によって切られている。遺構の重複のない両側も、特に遺物が多いとか、焼七や床が認められるなどの特徴はなかった。

3号掘立柱建物址の短軸間の距離は、a・b間が236cm、c・d間が220cm、e・f間が244cmを測る。長軸間の距離は、a・c間が400cm、c・e間が385cm、a・e間が784cm、b・d間が395cm、d・f間が360cm、b・f間が755cmを測る。

4号掘立柱建物址の短軸間の距離は、a・b間が264cm、c・d間が310cm、e・f間が270cmを測る。長軸間の距離は、a・c間が395cm、c・e間が376cm、a・e間が764cm、b・d間が360cm、d・f間が384cm、b・f間が746cmを測る。

各柱穴の規模は、径63~90cmで、深さは52~75cmを測る

第3節 土 坑

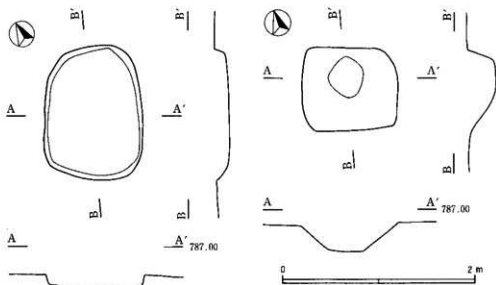
本遺跡からは、2基の土坑が検出されている。2号土坑が欠番となっているが、これは2号掘立柱建物址の柱穴eを当初2号土坑としていたためである。

1 1号土坑(第18図)

本址は、E-2区北東に位置する。平面形態は、隅丸長方形を呈する。規模は、長径143cm、短径103cm、深さ13cmを測る。長軸方向は、N-30°-Eを指す。遺物の出土はなく、時期も不明である。

2 3号土坑(第18図)

本址は、F-2区北東に位置する。平面形態は、隅丸長方形を呈する。規模は、長径102cm、短径89cm、深さ30cmを測る。長軸方向は、N-71°-Wを指す。遺物の出土はなく、時期も不明である。



第18図 1・3号土坑 (1/40)

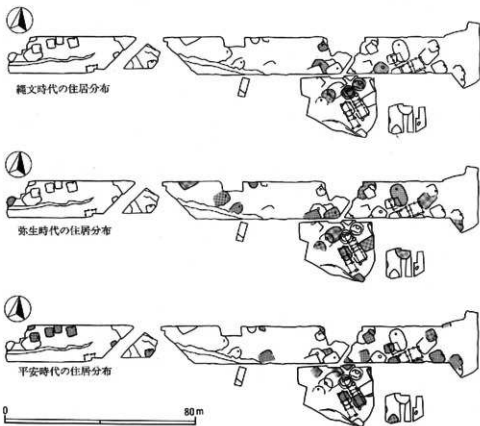
第三章 ま と め

縄文時代

縄文時代の住居址は、今回の調査で重複・拡張を含め、5軒検出されている。かつての調査でも3軒の住居址が検出されているが、いずれも今回調査した地点の北側にあたり、阿弥陀堂遺跡全体から見ると小さくまとまっていると言える。

時期は縄文時代中期後半にあたるが、住居址が近接しているものばかりでなく、建て変えや重複関係を示すものがあること、同じ縄文時代と考えられる掘立柱建物址と重複することなどから、ある期間継続して営まれたのではないかと考えられる。

本遺跡からは4棟の掘立柱建物址が検出されている。これらのすべてが柱を建てた後、隙間に礫を充填したものである。本遺跡はローム面を40～50cm掘り下げると礫や砂混じりのロームとなる。柱穴を掘った際に出土した礫をそのまま充填したと考えられ、特に他から持込んだものとは考えられない。1号掘立柱建物址と2号掘立柱建物址、3号掘立柱建物址と4号掘立柱建物址の双方が重複しており、重複関係のない1・2号掘立柱建物址と3・4号掘立柱建物址も近接していることから同時に存在したものでないことは明らかであるが、すべての掘立柱建物址が6本柱と考えられること、同じ方向を向いていることなどから、ほぼ同じ時期に属し、建て直しが行われたと考えてよいものと考えられる。



第19図 時代別遺構分布図 (1/800)

弥生時代

弥生時代の住居址は、かつて調査が行われた13軒に、今回新たに検出された5軒を含め、17軒となったが、広く分布しているようで、集落の広がり把握できていない。

住居址の形態で見ると、隅丸長方形を呈する住居址と、長円形を呈する大形の住居址の2種があるようである。どちらの住居址も、長軸方向が北から40~50°西へずれたものと、40~50°東にずれたものの2種がある。約90°ずれていることになるが、重複関係にあるものや、近接したものがあることと合せ、かなり継続的に営まれた集落であったと推測することが出来る。

弥生時代後期の住居は、今回の調査と並行して行われた永明中学校グランド遺跡(108)でも2軒検出されている。かつて調査が行われた2軒と合せ、こちらも更に大きな遺跡となることが予想される。調査が行われていない本遺跡との中間地域の状況は明らかでないため、ほぼ同時期に近接する集落があったものか、大きな集落が永明中学校グランド遺跡にまで広がっていたものかを現時点で推測することは難しい。

阿弥陀堂遺跡周辺の弥生時代遺跡には、前述の永明中学校グランド遺跡の他、本遺跡の北側の

永明寺山麓にかかる斜面にある一本樁遺跡(107)がある。阿弥陀堂遺跡や永明中グランド遺跡の様な平地の集落と、一本樁遺跡の様な山麓の斜面にかかる集落とがどのような関わりを持つのか、それぞれの集落の人々が、どのような生業を持っていたのか考えると、興味深いものがある。

平安時代

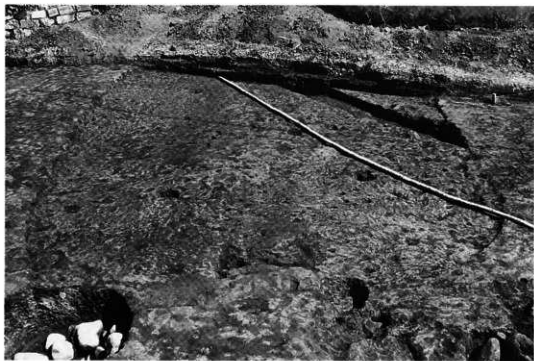
平安時代の住居址は、今回の調査も含め、いたるところで検出されている。今までに検出された住居址23軒に今回検出した住居址5軒(1軒は同一の住居址と考えられるため省く)を合せ、28軒の住居址が検出されたことになる。弥生時代後期の集落と共に、その範囲はさらに広がっていることは確実である。

平安時代の住居址も、重複している例やカマドの位置の変更があるものがある他、近接している例が多いこと、カマドの位置が北壁にあるものや東壁にあるものがあることなどから、かなりの期間にわたって継続して営まれた集落であることが理解される。

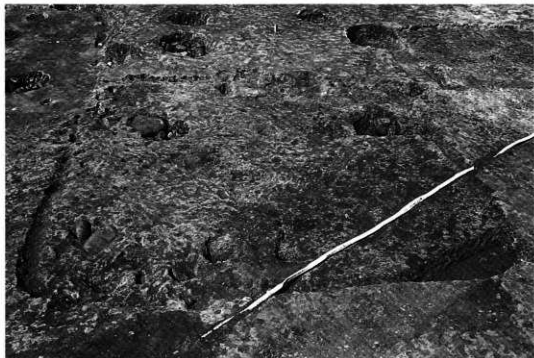
茅野市は、縄文時代中期の遺跡が多いことで知られている。それ以降の時期については、数が極端に少なくなってしまう。特に、弥生時代以降、古墳時代や奈良時代の集落遺跡はほとんど知られていないのが現状である。しかし古墳時代について言えば、永明寺山麓を始め、多くの古墳が存在しているのであって、その古墳群を造った人々の集落がどこかに存在しているはずである。それらの多くは、現在の集落と重なり合っており、発見が難しいと言うのが実情ではないかと考えられる。平安時代以降、この阿弥陀堂遺跡の近辺が賑わうのは、上原城とその城下町が出現する中世後半になってからとなるが、江戸時代になり、諏訪地方の中心が上原から現在の諏訪市になる高島城へ移ると農村化してしまうようである。



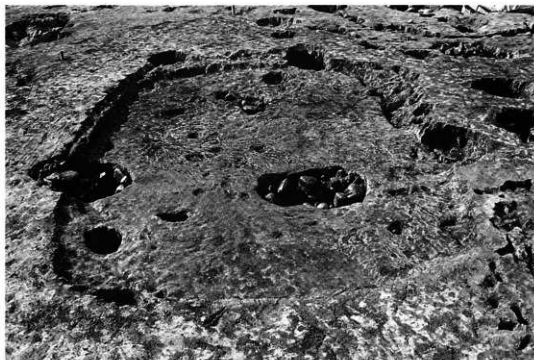
1 全景(西から)



2 1号住居址(西から)



1 2号住居址(南から)



2 3号住居址(南から)



1 4号住居址(南から)



2 5号住居址(南から)



1 6号住居址(西から)



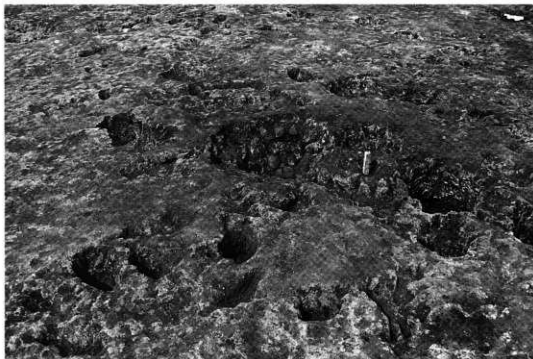
2 7号住居址と6号住居址が(南から)



1 8号住居址(西から)



2 9号住居址(南西から)



1 10号住居址(南から)



2 14号住居址(北から)

1 1・2号掘立柱建物址
(北西から)

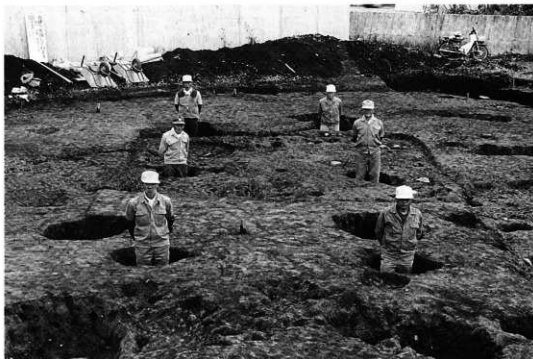


2 1号掘立柱建物址
(北西から)



3 1号掘立柱建物址
(南西から)





1 2号掘立柱建物址(北西から)



2 2号掘立柱建物址(南西から)



1 3・4号掘立柱建物址(北西から)



2 3・4号掘立柱建物址(北西から)



1 2号住居址須臾器出土狀態



2 5号住居址繩文土器
(1-3)出土狀態



3 5号住居址繩文土器(1)
出土狀態

1 5号住居址縄文土器
(2・3)出土状態



2 5号住居址縄文土器
(4)出土状態



3 5号住居址石囲炉と炉脇
縄文土器(5)出土状態
(南から)





1 6号住居址弥生土器出土状態



2 9号住居址埋裏出土状態

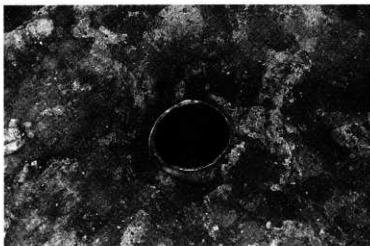


3 9号住居址埋裏断面
(東から)

1 9号住居址炉脇縄文土器
出土状態



2 11号住居址埋竈炉



3 11号住居址埋竈炉断面
(東から)





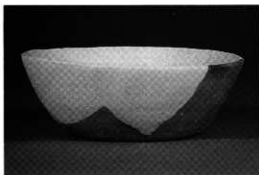
1 13号住居址弥生土器出土
状态



2 1号掘立柱建物址柱穴



3 1号掘立柱建物址柱穴



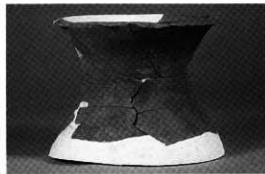
1 1号住居址出土须惠器



2 2号住居址出土须惠器



3 2号住居址出土须惠器



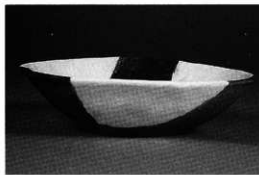
4 3-1号住居址出土弥生土器



5 3-2号住居址出土土师器



6 3-2号住居址出土土师器



7 3-2号住居址出土土师器



1 5号住居址出土縄文土器(1)



2 5号住居址出土縄文土器(2)



3 5号住居址出土縄文土器(3)



4 5号住居址出土縄文土器(4)



1 5号住居址出土縄文土器(5)



2 5号住居址出土縄文土器(6)



3 5号住居址出土縄文土器(7)



4 6号住居址出土弥生土器



1 6号住居址出土弥生土器高环



2 9号住居址出土土埴



3 11号住居址炉体弥生土器



4 13号住居址出土弥生土器

阿弥陀堂遺跡

— 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

平成5年3月20日 印刷

平成5年3月24日 発行

編 纂 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
発 行 茅野市教育委員会

印 刷 ほおずき書籍株式会社
